

「アニマルウェルフェア」 妹背牛牧場の



妻 牧子さん

経営者 佐々木 亮太さん

経営面積 (ha)

採草地	飼料用 とうもろこし	施設	経営面積
35.2	16.6	1.0	52.8

乳用牛の飼育頭数(頭)

経産牛 (出産を経験した牛)	未経産牛	合計
60	31	91

妹背牛牧場データ
R6.1 現在

アニマルウェルフェア (動物福祉) って?

家畜を快適な環境下で飼育すること。ストレスや疾病を減らすことが結果的に生産性の向上、安全な畜産物の生産にもつながることから、農林水産省がアニマルウェルフェアの考え方を踏まえた飼育管理の普及に努めています。

市内で唯一、酪農経営に取り組み「妹背牛牧場」(町内4区)は、牛にストレスを与えることなく、良好な健康状態を保つことで生産性の向上を実現しています。

経営者の佐々木亮太さん(41)は、人間が牛を飼う経済動物としての概念を捨て、牛との信頼関係を最優先にする「牛ファースト」の経営に取り組んでいます。その結果、乳量が増え、乳質も改善。引退するまでの分娩回数も全道平均を上回り、牧場経営の強みとして数字に表れています。

30歳で脱サラした当時の佐々木さんは、酪農の素人でした。一から学び始めると、すぐに違和感を覚えました。

「牛が物のように扱われている…。人間によるストレスが、乳牛のパフォーマンスを下げているのではないか」

そう考えた佐々木さんは、人間と牛の違いを比較します。「足が4本、胃が4つ、言葉が通じない。違いはそれぐらい」。牛が能力を発揮するためには健康が基本にあり、人間と同じように快適に暮らせる環境に着目。牛との距離を縮める接し方を模索しました。

「酪農は牛へのサービス業」。

2017年、義父から経営移譲を受けた佐々木さんは、酪農家としての答えを導きます。動物を大切に、するアニマルウェルフェアは、大学の教授がセミナーのテーマに据えるなどの評判を呼び、道内外の酪農関係者が妹背牛牧場の視察に訪れています。

人懐っこい、あの子！

ニックネームは「頭ずつ！」

妹背牛牧場で暮らす牛たちは「モ、モ」と鳴くことはありません。人間を見ても安心して居るため、人懐っこい性格で近寄ってきます。

佐々木さんは「牛が鳴かないのは、のびのびとした生活の中で不満やストレスがないからです」と、その理由を説明します。

近寄ってくる牛を観察すると、まつ毛が長かったり、鼻が大きかったり、一頭一頭の表情が違います。

「この子はお尻がムチムチで産まれたから、ムッチー。こっちの子は髪の毛が長いから、モフモフ、あっちの子は耳が小さいから、コミミ」

一頭一頭にニックネームをつけることも、牛と同じ目線で接する方法の一つ。以前、牛に愛称をつけたら乳量が伸びたというテレビ番組を見た佐々木さんは「話題にしたら、みんなは信じませんでした。でも、愛称をつけることはかわいがるということだから、注意深く観察する。異変に早く気づけるので、結果的に乳量が伸びるんです」と、熱っぽく語ります。

「牛は自分を映す鏡」。人間から受けた優しさを牛たちが返してくれると、佐々木さんは言い切ります。

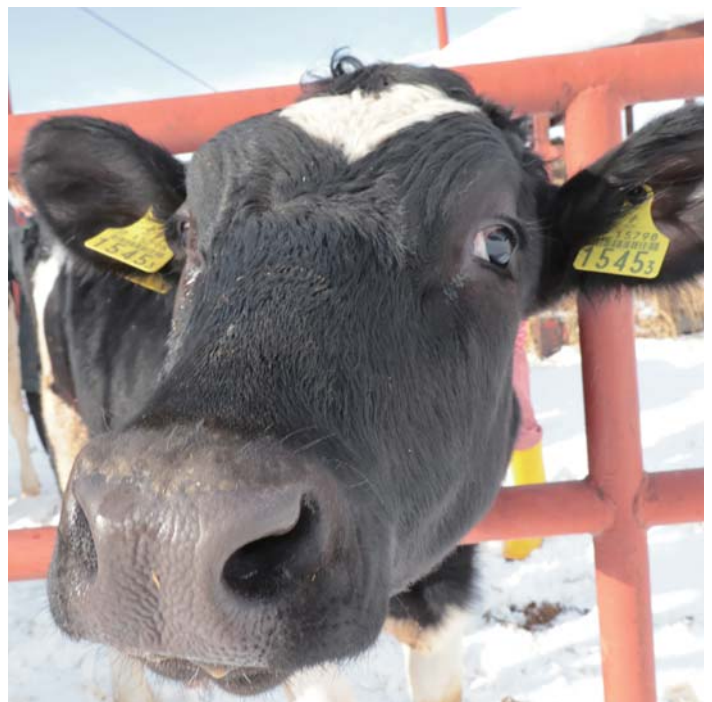
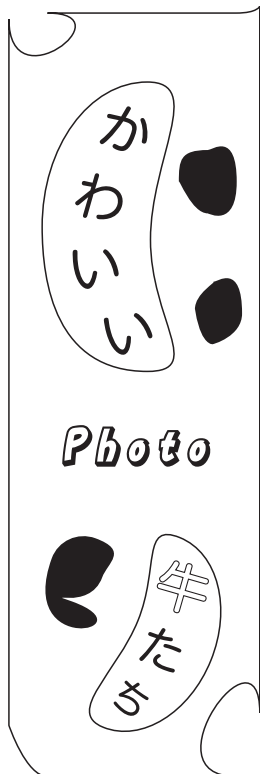
人間との信頼関係を築くのに最も重要な時期が生後90日までの哺乳期です。人間に例えると、3歳になるこの時期は特に子牛をかわいがります。

話しかけることで人間の声に怯えなくなり、体をなでることで手の温かさやにおいを覚えてもらいます。たっぷり愛情をかけて人間が怖い生き物ではないことを教え、人との関りによるストレスを極力減らします。将来的に7、800kgの巨体になることから、子牛のうちにはダメなことを叱ります。

3歳のミルクを15分程度かけて飲む「ちびちび哺乳」は消化不良を防ぎ、子牛を健康的に成長させます。離乳後の牧草は「一番草」と夏に収穫するやわらかい「二番草」を与えて、好みの方を食べてもらいます。牛は柵につながず、牛舎内を自由に歩き回れるように飼育しています。

佐々木さんは「牛が暮らしやすいようにお世話をするのは、酪農家にとって当たり前のこと。難しいことは何一つしていません」と、話します。

- カメラを近づけると、柵から顔を出して近寄ってくる牛たち。
- 食事中も嫌がることなく、ご飯を食べて眠くなっている時も
- 人間を警戒している様子はありません。



妹背牛牧場は2011年にエサ寄せロボット、14年には自動搾乳ロボットを導入し、それぞれ24時間・365日の稼働で労力の軽減に努めています。

ロボットの導入は人間の仕事を減らすことだけではなく、牛の健康管理や乳量増加の観点からも好循環が生まれます。

搾乳ロボットは空知管内で妹背牛牧場が唯一導入しており、効率的・省力的な酪農経営の先駆けとなっています。



反すう時間で、個体ごとの体調チェック！

※反すう→飲み込んだ食べ物を口の中に戻して咀嚼そしゃくすること。
微生物の働きを活発にして胃や腸内環境を整えます。



自動搾乳ロボット

搾乳について、佐々木さんは「1日に2回の搾乳と決めているのは、人間の都合です。無理に搾乳することはありません。能力の高い牛は1日に5回も搾乳します」。搾乳の回数やタイミングは牛に合わせることで、ストレスや病気が減り、牛の能力を最大限に発揮できる環境を整えます。

機械に慣れてきたら、乳の張った牛たちが自ら搾乳ロボットのゲートに入り、その後ろに列をつくることもあります。

搾乳時に体重や体温を把握できるほか、牛の首についたタグで反すう時間や活動量をリアルタイムで計測。個体ごとにパソコンで管理し、健康状態を確認しています。

異常があれば携帯電話にアラームで通知。病気の早期発見・早期治療につながり、獣医師の対応や治療など予期せぬ作業が減り、従業員の労力をさらに削減できました。

牛が食事に夢中になっていると、柵の近くにあるエサが顔から離れていきます。スコップで近づける人間の労力には限界があり、エサ寄せロボットが活躍します。



人の場合



エサ寄せロボット

エサ寄せロボットは、牛がいつでもエサを食べられるよう牛舎内を往復し、柵から顔を出す牛にエサを近づけます。少しの衝撃で緊急停止するため、誤って牛とぶつかっても安全です。

24時間体制で1時間に1回稼働します。特に活躍するのが、暑さで食欲が落ちてしまう夏場。日中に食べられなくなった分、涼しくなる夕方や夜にエサを食べる牛の食事を支えます。

腸と肝臓の健康に気を配り、エサに乳酸菌を配合。腸内環境を整え、自己免疫力が高まると、乳房炎は6、7割減りました。

美幌市出身の佐々木さんは滝川西高校を卒業後、旧妹背牛町農協（現・北いぶき農協）に就職。結婚後、妻・牧子さんの父が経営していた妹背牛牧場を引き継ぐ形で独立しました。

2017年に経営移譲。農業用資材を販売していた経験から「商品やサービスを売るときも信頼関係が大切。親身になって牛たちと接し、快適に過ごしてもらえれば、結果は後からついてくる」と、未経験からの挑戦が始まりました。

その結果、身構えることなくアニマルウェルフェアを実践する数少ない酪農家に。

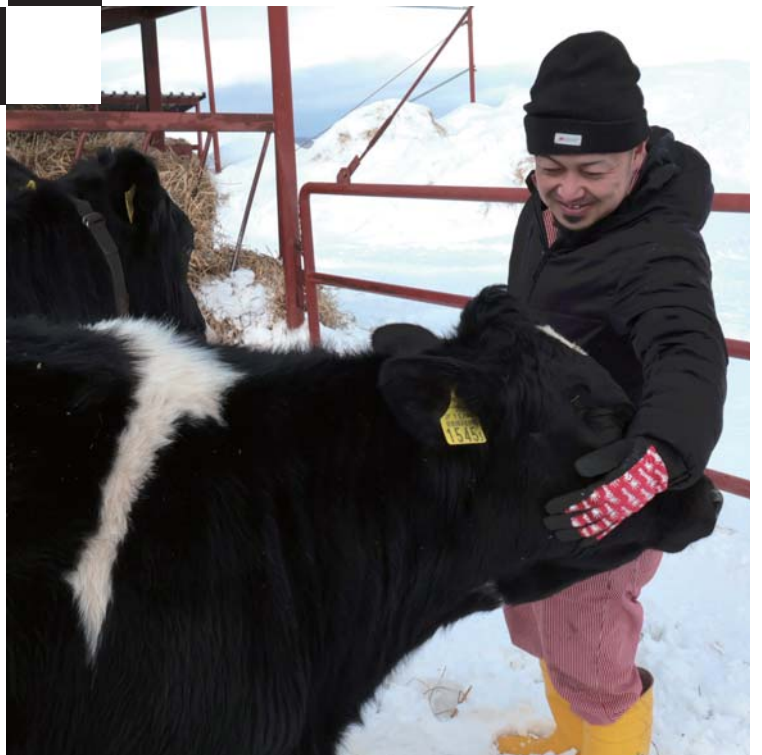
「牛の命と向き合う酪農の仕事は、私の人生観を変えてくれました」

酪農家になるまで



牧子さんのお話

最初は酪農を職業にするとは思っていませんでした。子どものころから働き詰めの両親を見て、家族旅行にも行けなかったのです。牛はかわいくて好きですよ。でも、職業にするのは違うなあって。夫は一度やると決めたら、揺るがないタイプ。当時、私たちの子どもはまだ小さかったので、この子たちを支えていくには、やるしかなかったんです。保育園の園児たちが牧場見学で遊びに来てくれることがうれしいです。牛にエサをあげる時に手まで舐められると、園児たちは大喜び。今では、牛とのふれ合いを楽しんでもらうことも酪農の魅力ですね。



アニマルウェルフェアは、世界的な潮流ながら国内で浸透しきれていないのが現状です。

酪農の素人が牛たちとどう向き合えば良いのか。真剣に考え抜いた佐々木さんは、自然とアニマルウェルフェアの道にたどり着きました。

「アニマルウェルフェアという言葉は本来、ありません。佐々木さんがこのカタカナを知ったのは、妹背牛牧場の取り組みがテレビや雑誌、SNSなどで評判を呼び、視察に訪れた人たちの発言からでした。

「酪農家にとって当たり前のこと。牛の健康に気を配れば、乳量は増えます」。佐々木さんが牛と同じ視線で接すると、牛たちも乳量で応えてくれます。

年間個体乳量は全道平均の9800キを大きく上回り、昨年は13900キを記録。国内に年間5、60頭しか出ないとされる、総生産乳量が2万キを誇る「スーパーカウ」も誕生しました。牛の引退するまでの平均出産回数は4.6と、こちらも全道平均の3.0を上回る実績を上げています。

今後の目標は、牛の疾病ゼロ、出産を繰り返しながら長生きする「長命連産」の実現で平均出産回数を5.5に伸ばすことです。

「牛たちが生きていく間は幸せに過ごしてもらいたい。一滴でも多く、おいしい牛乳を食卓に」

それが、牛に愛情を注ぐ酪農家の願いです。